2022.08.13

松沢哲郎のこと（9）

小嶋祥三

松沢の仕事に対していろいろな評価があるようだ。松沢が霊長類研究所や霊長類研究に多くの研究費をもたらしたことで、彼を高く評価する一方、研究が徹底してないことで批判的に見る人もいる。わたしは、彼の研究そのものの学術的な価値と、それが大学や研究所、研究領域に与えた影響を分けて考えている。わたしが松沢と同じ研究領域の人間であることが、このような見方を可能にしていると思う。また、松沢が独特な人であることが大きいと思う。これまで、このHPで述べたことと重なる面があるが、重複は厭わない。

わたしはこのHPで、山極前京大総長が松沢を高等研究院の特別教授にしたことを批判し、松沢にはこれといった世界的な業績がない、と書いたが、言葉が足りなかった。「画期的」という言葉を付け加えたい。ノーベル賞やフィールズ賞はまさに画期的な研究成果に与えられるのだろうが、松沢にはそれに対応する業績がない。チンパンジーをヒトと呼んだことだろうか？　チンパンジーが11個（？）の数字を大きさの順に選択できることを示したからだろうか？　「比較認知」という研究領域の名称をつくったことだろうか？ チンパンジーをヒトと呼ぶには学問的に問題があり、現実にも合わない。チンパンジーの数の実験は盛んだったチンパンジーの言語研究の延長だろう。心理学は認知主義により厳しい行動主義の影響を脱していた。それが行動主義の牙城だった動物研究にも及び、多くの動物の研究者はその新しい潮流の中で研究をしていた。当時の比較心理学、動物心理学の本の題名にcognition, cognitiveという単語を見出すのは容易である。松沢はすでに大河となっていたその流れに名前を付けたのであり、新しい研究領域を創始したわけではない（彼はネーミングにとても敏感だ）。このように見てくると、松沢が行ったことは、学術的に画期的とは言えないだろう。まして、ノーベル賞やフィールズ賞の研究者が、「チンパンジーのじゃんけん」のような無惨な論文の共著者になり、論文を広報（宣伝）しまくるようなことは、考えられない。

一方、研究領域や研究所への貢献について、松沢はその特異な能力を大いに発揮したと思う。その点は多くの研究者と同意見である。松沢は自分の研究を多くの人に知ってもらいたいと思い、活発に広報をしていた。彼は研究テーマを、チンパンジーがヒトに近いことを明らかにする、と設定したと思う。このテーマは一般の人の興味をひきつけただろう。この点を強くアッピールするためにチンパンジーをヒトと呼んだものと推測する。そしてチンパンジーの優れた能力を実験データとして提示した。しかし、一般受けを狙うこのテーマの設定は、このHPで指摘したが、チンパンジーの認知機能の一面しか見ない、見ようとしないことになったと思う。チンパンジーの数字の実験について、足し算など演算の理解は未踏峰のテーマと思うが、松沢がそれらの点を検討し、発表したとは聞かない。こうなると、彼の仕事はあたかもショーのようになり、学術研究からずれてしまった印象を持つ。

2022.08.13

わたしは、松沢の研究のスタイルは文科行政が期待する研究者像に合致することを HP で述べた。松沢は自分の研究の広報に熱心なので、研究成果の納税者への還元は十二分である（彼はそれに適した研究テーマを選んでいる）。また、研究が注目を浴びることにより、企業との結びつきが増え、企業から研究費、資金を得ることができた。これらの点は、文科省のお眼鏡に適っただろう。彼の研究業績で、「文化功労者」まで得た。こういう能力は大したものである。この HP でわたしは、松沢は職業の選択を誤ったのではないかと述べたが、このことを指している。このような彼の活動は霊長研や霊長類研究に多くの研究費をもたらしたことを否定しない。その点は彼の功績だろう。ただ、最終的に霊長研を潰してしまっては、どうしようもない。

わたしは松沢が彼自身を貶めるような行動をこれ以上控えることを祈っている。